View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

吉備国際大学研究紀要
（医療・自然科学系）
第23号，47－52，2013

高齢の妻が在宅で夫の介護を継続する要因

木村　麻紀・和泉とみ代

The factors which aged wives continue home care nursing of their husbands

Maki KIMURA，Tomiyo IZUMI

Abstract

This study clarifies the causative factors for elderly wives continuing to provide home nursing care of their husbands over an extended period of time. The subjects comprised four elderly wives who had been providing home nursing care to their husbands for three years or more. Data collected from semi-structured interviews and nursing records, among other sources, was analyzed qualitatively and inductively. Analysis generated the following five categories related to extended home nursing care: 1）“caring for her husband is a wife's duty,” 2）“respecting her husband's thoughts,” 3）“strength of the wife,” 4）“sympathy for her husband,” and 5）“support for nursing care.” Research revealed that despite feeling the burden of caring for their husbands, elderly wives continued to provide nursing care, partially by adept support from family members and public services; they demonstrated their own strength by willingly accepting the continued duty of caring for their husbands.

Key words：female caregiver, spousal care, home nursing care, continue care

Ⅰ．はじめに

我が国においては，家族員の誰かに介護が必要となった時，それを女性が担うことが多い。男女平等の考え方の広まりや女性の社会進出に伴って「男は外で仕事をし，女は家庭を守る」という性別分業意識は薄れつつあるが，高齢者にとってはいまだ根強く残っているのではないだろうか。また，家族内で女性が担うケアワークは「何のためにという問いが失効する」「先天的・本能的な愛情」として発揮される行為とみなされ続けてきたという指摘もある[1)]ように，いまだ女性であれば，無条件に介護や育児を担うことを社会的に求められるだけでなく，意識づけられてもおり，それは特に高齢女性に強いのではないか。

介護者の約７割が女性であり，そのうちの６割が60歳以上である[2)]。かつて息子の妻たちが「嫁」として行っていた男性高齢者の介護を，老いた妻が肩代わりする形で変化している[3)]。これまでの女性介護者は老親の面倒を看ている嫁が多かったが，21世

吉備国際大学
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
Kibi International University
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan (716-8508)

紀に本格的な少子・高齢社会を迎え，世帯構造の変化から老老介護，つまり高齢の夫を高齢の妻が介護するというケースが増加している。今後，このような高齢の女性介護者は，有配偶者の割合や平均寿命の男女差からしてますます増えるであろう。

女性介護者についての研究は，心身の健康的特性を明らかにしたもの[4]や介護負担感の性差による比較[5～7]をしたものがあるが，高齢の妻に限って介護をどのようにして受け入れ，継続しているかを明らかにしたものは少ない。

そこで，高齢の妻の介護受け入れの要因を明らかにすることで，女性介護者の多くを占める高齢の妻がよりよい介護を継続できるよう援助するための示唆が得られると考える。

Ⅱ．研究の目的

本研究の目的は，在宅で夫を介護している高齢の妻に焦点を当て，どのようにして夫の介護を受け入れたのか，その要因を明らかにすることである。

Ⅲ．研究方法

1．対 象 者

３年以上の長期にわたって在宅で夫を介護している高齢の妻を対象に選定した。A市の訪問看護ステーションを利用する療養者のうち，３年以上在宅で夫を介護している高齢の妻で，研究参加の同意を得られた４名である。対象者である高齢の妻の平均年齢は75.0±2.2歳，被介護者である夫の平均年齢は77.3±1.7歳，平均介護期間は9.5±7.0年であった。

2．調査方法

半構造的面接と看護記録等から情報収集し分析した。面接調査は平成16年11月～12月に行った。面接場所は対象者の自宅である。半構造的面接を行い，夫の介護をしようと思った理由，これまで介護を続けることができた理由，介護することにどのような意義を感じているかなどを質問し，介護が始まった時点からこれまでについて自由に語ってもらった。面接内容は許可を得て録音し，その内容は逐語録とした。

3．分析方法

データは質的帰納的に以下の手順で分析した。①逐語録の中から，夫の介護について語られている記述を抽出する②記述データの意味を損ねないようコードをつける③意味の類似したコードをまとめサブカテゴリーとする④さらにサブカテゴリーのつながりを見出しカテゴリーとする

4．倫理的配慮

対象者には，研究への参加は任意であること，プライバシーは守られること，いつでも中断でき，それによって不利益は生じないことを説明した。また，

表１　対象者の概要

事例NO.	妻	夫	夫の疾患	介護期間（年）	要介護度	家族背景	利用サービス
①	70代後半	70代後半	脳出血 寝たきり	10	5	３世代同居で家族関係は良好 嫁に行った娘の協力もある	訪問看護 訪問リハビリ 通所介護
②	70代前半	70代後半	脳梗塞 寝たきり	7	5	夫婦二人暮らし 妻は夫の両親の介護もしていた経験がある	訪問看護 通所介護
③	70代後半	70代後半	脳梗塞	6	2	夫婦二人暮らし 同じ敷地内に長女夫婦がおり協力的	訪問リハビリ
④	70代前半	70代後半	くも膜下出血 腎不全（血液透析）	15	4	夫婦二人暮らし 子供は県外在住 夫の妹の協力あり	訪問看護 介護タクシー

面接の内容は許可を得て録音し，録音した内容は厳重に管理し，研究終了時には消去することなどを文書を用いて面接時に説明を行い，同意の署名を得た。

Ⅳ．結　　果

分析の結果，《妻にとっては務めである夫の介護》《夫の考えを尊重する》《妻の持つ強さ》《夫への労り》《介護への支援》という５つのカテゴリーが生成された。文中ではカテゴリーを《　》，サブカテゴリーを［　］で表す。「　」内にはサブカテゴリーに属する妻の言葉を逐語記録から記載した。

表２　高齢の妻が夫の介護を継続する要因

カテゴリー	サブカテゴリー
妻にとっては務めである夫の介護	夫の介護はしなければならないこと 介護は家族でしなければならないこと 夫に仕える世代の妻 夫の介護をすることに不満はない 自分が介護することが最善と考える
夫の考えを尊重する	夫は家で過ごすことを好む 病前の夫の厳格な性格
妻の持つ強さ	ストレス解消方法を持っている 長い年月も短いと感じる 楽天的な性格
夫への労り	夫にそばにいてほしい ふたりで頑張るという気持ち 介護を受ける夫を辛いと感じる
介護への支援	自宅での介護の大変さ 介護の技術を看護師から学ぶ 頼りにできる家族の存在 公的サービスをうまく利用できる

１．《妻にとっては務めである夫の介護》

このカテゴリーは，［夫の介護はしなければならないこと］［介護は家族でしなければならないこと］［夫に仕える世代の妻］［夫の介護をすることに不満はない］［自分が介護することが最善と考える］というサブカテゴリーで構成された。

「私らの時代は，男の人に仕えるいう時代でしたでしょう，もう何を言われても黙って…やっぱし自分がせにゃいけんいう気持ちがありますなあ」（事例①）や「もう私は看る看んいうか，看にゃしょうがないから看よんじゃけどなあ」（事例④）と述べられているように，もともと夫に仕えてきた高齢の妻は，夫の介護を理屈抜きに受け入れている。また，「家族だから面倒看にゃいけんいう，そういう考えじゃったな」「そんなことを言うたら病院に失礼にあたるけれども，私は病院任せにしとったらあそこまではよくなってなかったように思う」（事例④）と述べられているように，夫を家族で看ること，その中でも自分が中心となって介護することが夫にとって最も良いことだと考えていた。

２．《夫の考えを尊重する》

このカテゴリーは，［夫は家で過ごすことを好む］［病前の夫の厳格な性格］というサブカテゴリーで構成された。

「（出掛けるのが）あんまり好きじゃねえからな」（事例③）「本人はもうとにかく（家から）出たくないからね，言うこと聞いてくれん」（事例④）や「きつかった，私らもう怒られるばっかりして，若い時はね」（事例②）「ものすご難しかった。今はだいぶ優しくなったと言おうか」（事例④）と述べられているように，厳格な性格の夫のもとで過ごしてきた高齢の妻は，家で過ごしたいという夫の望みをかなえようと施設に預けることを選択せず自宅で介護していた。

３．《妻の持つ強さ》

このカテゴリーは，［ストレス解消方法を持っている］［長い年月も短いと感じる］［楽天的な性格］というサブカテゴリーで構成された。

「家のことだけ，お父さんにかかっとるだけじゃったらいけないから。外のことをするとまた気が晴れるんでしょうな」（事例②）「よく友達が来るから，話し合うたりなんだらしとったらな（中略）そん時にはストレス解消になるわな」（事例③）など，高齢の妻は，介護以外のことをすることや友人との時間を持つことで，介護のストレスをうまく解消していた。また，「あっという間。もう10年経ったんいうような感じ」（事例②）「いや，長かったいうより

も，なんか知らん間に10年経ったいうような感じじゃな」（事例④）と述べられているように，長い期間もそうとは感じることなく介護することができていた。そして，もともと「のんびりやるというか，行き当たりばったりで，なんか物事をしていくような感じじゃな」（事例④）というゆったりとした性格だったり，「もう自分，楽天家にならにゃおえん，いちいち気にしとったらおえん，あんまり怒ったって…」（事例③）というように介護する期間が長くなるにつれ物事を楽天的にとらえることができるようになっていた。

4．《夫への労り》

このカテゴリーは，［夫にそばにいてほしい］［ふたりで頑張るという気持ち］［介護を受ける夫を辛いと感じる］というサブカテゴリーで構成された。

「私もひとりぼっちになったら寂しいし。ただ主人はものを言わんけど縁におってくれるだけでやっぱり違いますし」（事例②）「やっぱりな，おらなんだらな，不安だわ，おじいさんは。私がおらなんだら。不安な気持ちがするわ」「私もおったら安心するわ」（事例③）という長年連れ添ってきた夫と離れずに過ごしたいという思いや，「これが夫婦じゃろうか，好きでこんな病気になったわけじゃないのに，かわいそうななあと，これが反対じゃったら私がどういう気持ちじゃろうかなと思うときもある」（事例③）と介護を受ける夫の姿を見て辛いと感じ，夫への労りの気持ちで介護を続けていた。

5．《介護への支援》

このカテゴリーは，［自宅での介護の大変さ］［介護の技術を看護師から学ぶ］［頼りにできる家族の存在］［公的サービスをうまく利用できる］というサブカテゴリーで構成された。

「今までこう，下（の世話）やこうしたことがなかったからねえ，そやから，もう帰ってこれは大変じゃなあとは思いましたけども」（事例①）と自宅で介護をするのは大変だと感じながらも，「病院で看護婦さんがしょうられるのをじっと見たり聞いたりして」（事例①）「管入れる（導尿）のは私が看護婦さんに習うて」（事例③）というように，介護技術を看護師から学びながら夫の介護に取り組んでいた。「家のもんがみんな協力してくれましたからね」（事例①）「まあ私だけの力じゃお父さんここまでできんと思う。娘や息子やな，孫やひい孫じゃの力もあるんじゃろうと思う」（事例③）と述べられているように介護に協力的な家族がいたり，「やっぱりよかったですね…もうそれをどなたにも頼まず自分だけで家でしようと思うたら，そら10年間持ちません，持たなかったと思います」（事例①）や「お父さんもね，ヘルパーさんがついて優しゅう言うて下さるから，最初からそれはよかった」（事例④）というように，自分ができないところは公的サービスにゆだねることで介護を続けていた。

V．考　　察

高齢の妻は，夫の介護を大変だと感じながらも，家族や公的サービスをうまく利用し，自らの強さを発揮しながら，夫の介護を務めとして受け入れていると考えられた。

介護は，「男は仕事，女は家事」という性別役割分業の論理と，「女性は男性より情緒的でやさしい気配りができる」という性別による特性の意味づけの差異により女性がやることとされてきた[8)]。家夫長制が残っていた戦前生まれの対象者にとっては，妻が夫に仕えることは当然のこととして受け入れられており，それは夫が病気になっても変わることなく，妻の務めであると無意識のうちに受け入れているのではないだろうか。さらに，家から出ることを好まない夫の望みを叶えたいという夫婦愛の表現として自宅での介護を選択したのではないだろうか。

高齢の妻の介護負担の大きさについて，加齢による身体的精神的能力の低下のみならず，夫に対する

ケア役割に彼女らを閉塞させていく社会的心理的拘束力の強さに起因するところが大きいだろう[9]という指摘がある。しかし，本研究の対象者は6年から15年と長期に介護を継続しているが，夫の介護をすることに不満を持ってはいなかった。その要因として，家族関係が良好で家族の協力をうまく得ることができていたことや，自分が介護の中心になることが必要であると考えながらも，ひとりで介護を抱え込んでいないことがあると思われる。自分ひとりでできないことは家族に協力してもらったり，公的サービスにゆだねたりすることがうまくできていたからではないだろうか。

加藤は，ケア提供者としての新たな責任は単に女性の生活にもう一つの責任を加えるにすぎず，ケア提供の仕事のために時間や力を貯えたいと思っても，他の責任から解放されることはない[10]と述べているが，本研究の対象者は，自宅で夫の介護をすることは大変だと感じながらも，ストレスをうまく解消することができ，楽天的に物事を考えることができる自分の強みを発揮しながら，うまく介護を続けていた。そこには長年仕えてきた，病気になってしまった夫への労りの気持ちもあると考えられる。また，女性介護者は周囲の期待を受け，状況の認知を肯定的に変容させざるを得ない状況になり，「介護役割を積極的に受容する」可能性が高い[11]という指摘があるが，本研究の対象者は自分がしないといけない，あるいは看ねばならないから看ているという妻としてはせざるを得ない務めであるという受け入れ方をしているように思われる。

女性は家族の介護を担うことになったとしても，家庭内でそれまで果たしてきた家事や社会との付き合いなどの役割から逃れられることは少なく，高齢の妻であってもそれは同様であろう。高齢の夫が妻の介護を担うケースが増えており，高齢夫婦を孤立させないよう地域全体で支援する必要がある[12]と指摘したが，それは高齢の妻が夫を介護している場合でも同様であると思われる。とりわけ，家族の介護は女性（妻，嫁，娘）が担うべきであるという考えが浸透しており，家族機能が低下している今日において，ますます高齢の妻への負担が大きくなると考えられる。

本研究の対象者は，ふたり暮らしの夫婦がほとんどであったが，家族のサポートを受けることができていた。これは介護を継続させる大きな要因であったと考えられる。しかし，今後しばらくは高齢化が進むこと[13]，世帯構造の変化[14]などにより家族からの支援を受けることはより困難となることが予測される。

2000年に施行された介護保険法は，介護を社会化することをうたっているが，在宅介護のすべてを公的サービスでまかなうことは十分にできていない現状がある。森は，「介護は女性の役割」といった性役割規範が介護者自身および周囲にあると，女性介護者は義務感からサポートを受けにくくなり，負担感やストレスは高まるであろう[15]と述べているが，そのような考え方はいまだ社会に根強く残っていると思われる。他の家族員あるいは家族以外のサポートを安心して受けられるような対策が今後必要になってくるだろう。

Ⅵ．結　　論

在宅で夫の介護をしている高齢の妻が介護を継続できる要因を妻に焦点を当て分析したところ，高齢の妻は，夫の介護を大変だと感じながらも，家族や公的サービスをうまく利用し，自らの強さを発揮しながら，それを務めとして受け入れ介護を継続しているということが明らかとなった。今後ますます他の家族員の協力が得られにくくなってくることが予測され，公的サービスのさらなる充実と活用のしやすさが求められる。

引用文献

１）春日キスヨ：介護問題の社会学，ｐ12，岩波書店，2001.

２）内閣府編集：平成24年度版高齢社会白書，ｐ35.

３）１）に同，ｐ22.

４）星野順子他：女性介護者における心身の健康的特性，日本公衆衛生誌，56（２），ｐ75－86，2009.

５）杉浦圭子，伊藤美樹子，三上洋：在宅介護の状況および介護ストレスに関する介護者の性差の検討，日本公衆衛生誌，51（４），ｐ240－251，2004.

６）大槻優子，樋口キエ子:家族介護者の負担感に関する研究－性差による相違－，女性心身医学，16（３），ｐ306－314，2012.

７）藤原和彦他：在宅認知症高齢者を介護する家族の家族機能と介護負担感の関連性分析，柳川リハビリテーション学院・福岡国際医療福祉学院紀要，７，ｐ22－27，2011.

８）春日キスヨ：介護とジェンダー　男が看とる女が看とる，ｐ179，家族社，1997.

９）１）に同，ｐ24.

10）加藤悦子：介護殺人－司法福祉の視点から，ｐ172，クレス出版，2005.

11）５）に同，ｐ248.

12）木村麻紀他：高齢の夫が在宅で妻の介護を継続する要因，吉備国際大学紀要，(22)，ｐ15－25，2012.

13）３）に同，ｐ4.

14）３）に同，ｐ14.

15）森千佐子：在宅高齢者の主介護者が求めるサポートの充足状況と精神的健康との関連，介護福祉学，15（１），ｐ31－40，2008.